

イラク・ガラフ油田開発事業における CSR

石油資源開発株式会社 (PETRONAS Carigali Iraq Holding B.V. 出向) 村山 誓一

現在、筆者はマレーシア国営石油会社であるPETRONASのイラクでの石油開発事業を行う事業会社に出向し、対外関係と庶務を担当する部門で勤務している。現場は、2009年に行われたイラクの第二次入札において当社石油資源開発がPETRONASと共同で開発事業を受注した、イラク南部のガラフ油田である。同事業は、イラク南部に立地する既発見未開発の同油田において、日量23万バレルの原油生産の達成を目的とする作業を請け負う内容である。本事業においても、参画する複数の会社のうち1社が作業を実施する主体となる石油開発業界での一般的な事業形態をとり、PETRONASがオペレーターに選任されているが、当社も事業の初期から継続的に様々な職種の社員を同社に派遣し、マレーシア人と現地採用のイラク人が主体となるPETRONASの社員とともに現地での作業に従事してきた。この派遣は、現場での事業の実務を担いつつ、国際的に展開し成功しているPETRONASの業務フローやノウハウを内側から直接触れることができるとともに、様々なバックグラウンドの人々と協調して事業を進めていくことを経験する貴重な機会となっている。

筆者がガラフ油田のPETRONASに派遣されるのは二度目である。2013年～15年までの約3年間勤務した後、19年5月から再度出向している。現地情勢に鑑み、安全保障の観点から職場兼生活拠点からの外出の自由が著しく制約される等生活環境は厳しいが、二度目のイラク勤務を打診された際には、現地での生活に関心があり、躊躇なく応じ赴任した。

ガラフ油田の周辺地域

イラク南部のジー・カール県北部に立地するガラフ油田は約330km²と広い。その中には、人口10万人超の町リファーイーが油田内にあるほか、油田の境界付近にも人口数万人のカルアト・スッカルという町が立地しているなど、地域の人口も相当な規模である。石油開発事業の関連施設は何れの町からも離れて立地しているが、その周辺には数十件の村落が点在し、合計4～5万人が居住しているとされる（正式な人口統計ではなく、村で聞き取った住民の数を合算して得た数字）。

そのような事情から、地域社会は事業の重要なステークホルダーとなっている。石油施



イラク県区分地図：イラク南部に位置するジー・カール県 (Dhi Qar)
 出所：d-maps: Retrieved from https://d-maps.com/carte.php?num_car=4294&lang=en

設の用地の確保は契約上イラク政府側の責任だが、円滑に事業を進めるためには地域住民の理解が不可欠であり、現場で操業する事業会社としても良好な関係を築くことが重要となっている。そのため、地域社会において期待される役割を果たすべく、可能な範囲でCSR活動を実施している。

ガラフ油田におけるCSR活動

ガラフ油田の地域住民が石油開発事業に期待することは、雇用、事業における調達の入札への参入、社会インフラの整備である。イラク政府側の事業カウンターパートである

ジー・カール石油公社（TOC）と協力し、住民の方々の理解を得て現地社会の一員と認識してもらえるよう可能な限り対応を行っている。

(1) 雇用

ガラフ油田周辺地域には大きな産業もなく、公務員や農業、近隣の町でサービス業に従事する人々の他は定職に就けない割合が高いとされている。地域住民からは雇用機会の提供に対する要望が高く、それに応えるため、PETRONASではTOCと協力して一定の高い割合の雇用機会を地域住民に優先して提供している。

(2) 調達

石油開発事業で外注される様々な役務は、地元ジー・カール県内の企業にとっても商機となるが、外国企業との取引に慣れていない企業にとっては異なる商慣習や言語が入札への参加の敷居となっている。そのような状況であるため、地元企業向けの説明会を開催し、アラビア語で分かり易く入札要件等を説明することでベンダー登録を促している。

(3) 社会インフラの整備

政府の財政状況が長期に渡り厳しい中で、行政による公共施設の整備・補修が行き届いておらず、住民の生活の質が制限されている。TOCとも協調し、下記のような事業を実施してきた。

- 村落へのアクセス道路の建設

石油施設周辺の村落につながる道路の多くは舗装されておらず、降雨があると車両の通行が困難となっていた。

- 学校施設の建設

地域の大抵の村には小学校があり、主要な村には中学校もあるが、多くは生徒数に比して教室等の数が不足している。2部制、3部制をとって対応しているところもあるが、それでもすし詰め状態であることが多かった。

- 小型浄水施設の建設

地域の村には水道は引かれておらず、浄水施設が設置されていない村では飲用を含む生活用水はタンクローリーで運ばれてくるものを購入する等、不便な状況となっていた。



村落へのアクセス道路建設



地元の学校に施設した施設の例

(4) その他

地域住民はイスラム教徒が大半を占めるため、毎年ラマダーンには低所得家庭に食料品の詰め合わせを配布し、犠牲祭には従業員の寄付で牛や羊を購入して屠り、肉を配布するなどしている。また、イラクにはシーア派の巡礼地であるカルバラーとナジャフがあり、毎年アルバイーン（イスラム教シーア派の宗教行事）前の時期には数百万人が参詣するが、ガラフ油田は南方から同地への巡礼路の一つの途上に位置しており、時期が来ると多くの徒歩巡礼者が通過する。これらの巡礼者は遠方から出発する場合、2週間以上歩き続ける人もいると言われ、地域の習慣では巡礼者に食事や休憩所、一晩の宿を無償で提供することが行われている。ガラフ油田開発事業でも、これに従い毎年巡礼者への食事の提供を行っている。これらは、社会貢献の意図に加え、

地元社会との感覚的な隔たりを縮めることを願って行っている。

また、2020年以降のコロナ禍はイラクにも大きな影響を与えており、感染者数が増加した際には医療体制の脆弱さが問題となった。これに対応して、感染者隔離用のプレハブ建屋や酸素ボンベの供給、地域の学校へのマスク・消毒液配布など、出来る範囲内で支援を実施している。



ラマダーン月の食料品配布



寄贈したコロナウイルス感染者用の隔離施設

なお、上記のように可能な範囲で対応しているものの、経済的に厳しい状況に置かれる中で、当然地域の住民からはより多くを望む声上がる。特に、雇用については、事業として雇用できる人数は限られており、時として雇用を求める人々が平和的ながら示威行動に出ることもある。イラク人の雇用を進めてはいるが、外国人が働いているため雇用機会が正当にイラク人に与えられていないという印象を持たれてしまうこともあり、誤解の解消に苦慮することが度々あった。

だが一方で、現地での作業開始から10年近くを経て、ガラフ油田開発事業が地域の一部になっていると感じることも事実である。住民全員の期待を満足させることはできないが、まとまった規模で地元の人々が事業関係の雇用で生計を立ててきている。また、長年放置されてきた地域のインフラ整備にも対応する等、徐々に目に見える形での貢献も現れている。地域住民との関係構築の証として、地元部族の長の一人からは、治安上の不安がある中で、ガラフ油田で操業するPETRONASが安全上の危険にさらされるようなことがあれば地域を挙げて守るという発言もなされている。

社会経済的に長期に渡り困難な状況に置かれてきた場所で操業する立場として、時間はかかるが、CSRの観点から出来る範囲で地域の要望に対応しつつ、コミュニケーションを継続して双方の理解に努めながら関係を保ってきている。

終わりに

石油開発に関わる業務のうちの多くは、他の石油開発の現場での知見を大いに応用することが可能である一方、操業する地域との共生は応用が難しいものの一つである。外国から来て操業する企業にとって、地域とそこに住む人々との関係は、ステレオタイプを排して対話することを通じて、相手を知りこちらの立場を理解してもらいながら築いていくしかないもので、それを維持していくためには手間と時間がかかる。容易な解のない仕事だが、興味の尽きないものでもある。

(写真は全て筆者の同僚が撮影)